

ライフスタイル移住の視点から見た 中国人の越境的移住

—日本の非大都市への移住を事例に—

XU Ying

グローバル化の進展に伴い、世界中に越境的な移動・移住が急増し、その移動・移住動機やプロセスも多様化、複雑化している。こうした背景の中、様々な目的を抱えて来日する中国人が増えている。日本における中国系移民・移住者を対象とする研究は、主に 1980 年代以前のオールドカマーとそれ以後のニューカマーに分けられる。前者は戦争や植民による直接的、間接的な歴史的原因で日本に滞在するのに対し、後者は就労、就学、国際結婚など多様な理由で来日している。ニューカマーの来日動機について言及した既存の研究では、移住者の母国と日本の間の経済格差がプッシュ要因になり、日本における労働力不足や農村地域の花嫁不足がプル要因となるとの分析が多い。しかし、従来の経済移民と異なり、現代においては人々の移動や移住には多様な要素が絡み合っており、もはやこのような従来のプッシュとプル要因だけで分析できるものではない。

一方、これらの従来の経済移民と異なる様々な背景・動機を持つ国際移住者に対して研究者の関心が高まり、リタイアメント移住、レジャー移住、反都市化、セカンドハウス所有、季節的移住などの概念で研究されてきた。社会学者の Michaela Benson と Karen O'Reilly もその一員であるが、従来の概念はこの傾向の複雑さを把握し、その様々な要素を統合するのに十分ではないと考えた。これらの新しい形の移住は、それぞれ特殊性を持ちつつも、ライフスタイルへの関心は共通しているため、「ライフスタイル移住」として Benson と O'Reilly によって名付けられた。

近年、日本の非大都市に移住する中国人移住者が存在するが、こうした人たちは、なぜ、どのように移住に至ったのだろうか。彼・彼女らは、どのようなライフスタイルを志向し、また、移住によってそのライフスタイルをいかに実現するのか。これらの問題関心から本研究では、Benson と O'Reilly が提唱した「ライフスタイル移住」という分析枠組みを用いて、日本の非大都市に移住している中国人移住者の移住実践の解明を試みた。Benson と O'Reilly によれば、ライフスタイル移住とは、あ

らゆる年齢層の比較的裕福な人々が、様々な理由でより質の高い生活を求めるためにパートタイムまたはフルタイムで移住することである。

このフレームワークを使用する本研究の目的は二つある。一つ目は、経済的要因を主な原因としない中国人移住者の移住行為を解釈し、彼・彼女らの移住動機や移住プロセスを解明することによって、これまで表面化されていない一部の地方移住者の実態を明らかにすることであり、二つ目は、事例研究を通じて実証的研究の蓄積に寄与すると同時に、ライフスタイル移住概念を補足することにある。

本論は、5つの章から成り立っている。

第1章では、本研究の研究背景及び筆者の問題関心を説明し、研究の目的と研究意義について述べた。

第2章では、ライフスタイル移住の概念を明確にした上で、ライフスタイル移住が増加する社会背景を説明した。また、ライフスタイル移住者と関連する中国の新移民や、日本における中国系ニューカマーに対する研究もレビューし、「ライフスタイル移住」という視点からは、日本に移住している中国人移住者の分析がほとんど行われていないことを指摘した。

第3章では、本研究の調査設計やサンプリングについて紹介し、主に調査方法、調査内容、調査対象の選定及び調査の実施時期について詳しく説明した。また、本研究のタイトル、及び論文の中に使用する「非大都市」という用語の使い方についても説明した。

第4章は本論文の中心部分であり、調査対象者から得られた質的データを用いて分析を行う。主に、①なぜ日本に移住したのか、②なぜ日本の非大都市に移住したのかという二つの視点から論じている。一つ目の部分では、「職場」「教育」「福祉」「環境・食品安全」「人間関係」という五つの側面から、移住者たちの日中社会に対するイメージに即して分析を行った。それにより、イメージがどのように構築され、また、それらのイメージがどのように移住実践に影響を与えたのかを論じた。二つ目の部分では、「留学経験」「反都市化」及び「格差社会」という三つの観点から考察した。分析によって、留学期間中の移住先に対する「肯定的な態度」が将来の移住決定にポジティブな影響を与えることを示した。また、本研究の対象者は、先行研究におけるライフスタイル移住者と一致する特徴があると同時に、移住先の選択について異なる結果が現れたこともこの部分で指摘した。さらに、過去の日中両国の制度が現在の日中社会の地域構造に影響を与え、移住者たちのイメージや移住決定にも影響を及ぼしていることを明らかにした。

最後に第5章では、分析の結論をまとめ、本研究の限界を提示した上で、今後の課題について述べた。本研究によって、ライフスタイル移住者の移住先に対するイメージや想像だけでなく、故郷へのイメージも移住行動に大きく影響することが明らかにされた。また、本研究の中国人移住者は、先行研究におけるライフスタイル移住者と比べ、①長期滞在から移住・定住に転換していること、②

Benson と O'Reilly が分類したライフスタイル移住者の 3 類型に当てはまらないこと、③移住は移住者本人のためだけでなく、次世代のためでもあることが特徴であることを指摘した。以上の点から、本研究は既存のライフスタイル移住の概念を補足するものであることを示した。